令和６年度
愛媛県議会海外派遣（スペイン）
結 果 報 告 書

令和６年５月１９日（日）～２７日（月）

スペイン

目　　次

１．団長あいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１

２．派遣目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２

３．派遣期間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３

４．議員団の構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４

５．派遣結果報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５

１．団長あいさつ

スペインは、伝統と文化を大事にしつつ、新しいムーブメントも勃興し、世界注目の地域となっている。今回の議員派遣の目的は、世界中から人々が集う源泉となっている芸術と食、また「巡礼の道」などの宗教遺産を通じて、愛媛県との交流や県産品のアピール、また、愛媛県へのインバウンドの拡大に資する為である。団員各位をはじめ、今回の派遣にご協力戴いた皆様のお陰で、端緒は開かれたものと確信するところである。

今回の派遣団は、超党派の 7 人で構成され、地域的にも政治的風土も違う背景の団員である。また、塩出団員と私を除き、30 代、40 代。団員の個性も相俟って、非常に刺激的で新たな視座と発想を得られたことに感謝している。

円安の影響もあるが、消費税 2 割超えのお国柄もあり、とにかく物価が高いと感じる派遣であった。外食だけでは、庶民の暮らしは分からないので、地元のスーパーマーケットで食材を購入して食事会も実施した。地元の皆さんは、しっかり生活防衛に取り組んでいる印象であった。ワインなどアルコール類と乳製品、トマト、ジャガイモなどは、日本より安いが、葉物野菜が少なく割高なのも印象的であった。

生活習慣の違いから、戸惑うこともあった。昼食開始は午後 2 時頃からが多く、日本の夕食のような感じである。夕食は午後 9 時以降で軽め。この時期、日没が夜 9 時ごろなので、リズムを整えるのに苦労した。若い団員の皆さんは、朝から調査を兼ねてランニングをするなど、さすがに適応力の差を感じた。そのパワーで、今回の派遣も糧にしながら、愛媛の未来を拓くことを期待したい。

大航海時代を経て、世界に広がるスペイン語圏とキリスト教の壮大さも感じた。南アメリカからの移民や留学生、労働者も多く、東ヨーロッパやパキスタン、バングラディシュなどの南アジアの労働者もいる。しかしながら、国自体の失業率は高いとのこと。日本と同じく少子高齢化も問題となっていた。

因みにバスク地方で言われたのが「バルセロナへ行くのなら、スリに気をつけろ。全員がスリと思え。」との忠告である。大袈裟だと思っていたが、後ろポケットに突っ込んでいたお気に入りの帽子を見事にすられた。どうも東ヨーロッパ系の人がスリに多いとのことであったが、刑務所もいっぱいで、警察が摘発しても注意ぐらいで終わるケースが殆どとのこと。ヨーロッパの病んだ一面だなと感じた。日本と愛媛の安全管理を、意識を持って維持しなければと強く思う。

今回、芸術と食による地域振興でバスク地方、巡礼の道でサンチャゴ、スポーツと IT 先進利用等でバルセロナを訪問したが、行政関係の皆さんと懇談して感じたのは、地方政府の権限や独自性が強いことであった。地域のことは、地域で決めるとの気概も感じた。

詳しい報告は、団員各位の報告に委ねるが、今回の研修から得たものを今後の議会活動に生かしていくことをお互いに誓い合いたいと思う。

最後に、快く送り出してくださった議長をはじめ、県議の皆様、事務局、県職員の皆様等、多くの皆様のご尽力で有意義な派遣となった。改めて心からの感謝を申し上げ、挨拶とさせて頂きます。

愛媛県議会海外派遣（スペイン）議員団長　笹岡　博之

２．派遣目的

四国の共有財産である四国八十八ヶ所のユネスコ世界遺産登録へ向けた先進地サンティアゴ・デ・コンポステーラで視察を行うとともに、発信力強化への取組みを調査するとともに、ビルバオ市における芸術による街おこしをはじめ、食や景観を大切にすることでリゾート地として発展したサン・セバスティアン市、プロスポーツを活かした地域活性化、本県が市場開拓を行っているバルセロナの魚市場やスマートシティ実地視察を行い、県政課題に対してより高度な政策提言・立案を行う。

３．派遣期間

令和６年５月１９日（日）～令和６年５月２７日（月）までの９日間

【日　程】

	月日	地名	時刻	スケジュール
1	5/19 （日）	松山空港 羽田空港 羽田空港 ﾌﾗﾝｸﾌﾙﾄ ﾌﾗﾝｸﾌﾙﾄ ビルバオ	7：30 8：55 11：50 19：05 20：40 22：50	松山空港　発 羽田空港　着 羽田空港　発 フランクフルト空港　着 フランクフルト空港　発 ビルバオ空港　着 （ビルバオ泊）
2	5/20 （月）	ビルバオ	11：00 16：00	サン・セバスティアン市役所表敬訪問 バスク・クリナリー・センター （ビルバオ泊）
3	5/21 （火）	ビルバオ ｻﾝﾃｨｱｺﾞ･ﾃﾞ･ｺﾝﾎﾟｽﾃｰﾗ	11：00 18：10 19：15	ビルバオ市役所表敬訪問 ビルバオ空港　発 サンティアゴ・デ・コンポステーラ空港　着 （ｻﾝﾃｨｱｺﾞ･ﾃﾞ･ｺﾝﾎﾟｽﾃｰﾗ泊）
4	5/22 （水）	ｻﾝﾃｨｱｺﾞ･ﾃﾞ･ｺﾝﾎﾟｽﾃｰﾗ	9：00	サンティアゴ巡礼地視察 （ｻﾝﾃｨｱｺﾞ･ﾃﾞ･ｺﾝﾎﾟｽﾃｰﾗ泊）
5	5/23 （木）	ｻﾝﾃｨｱｺﾞ･ﾃﾞ･ｺﾝﾎﾟｽﾃｰﾗ バルセロナ	13：10 14：50	サンティアゴ・デ・コンポステーラ空港　発 バルセロナ空港　着 （バルセロナ　泊）
6	5/24 （金）	バルセロナ	9：30 10：45	在バルセロナ日本国総領事館表敬訪問 RCD エスパニョール視察 （バルセロナ　泊）

7	5/25 （土）	ﾊﾞﾙｾﾛﾅ		スマートシティ実地視察 （バルセロナ　泊）
8	5/26 （日）	ﾊﾞﾙｾﾛﾅ ﾌﾗﾝｸﾌﾙﾄ	10：25 12：35 14：05	バルセロナ空港　発 フランクフルト空港　着 フランクフルト空港　発 （機内泊）
9	5/27 （月）	羽田空港 松山空港	9：50 12：05 13：35	羽田空港　着 羽田空港　発 松山空港　着

４．議員団の構成

次のとおり、笹岡博之議員を団長に全７名の議員団を編成した。

【議員団名簿】

	氏名	期数	会派	備考
1	笹岡　博之	7	公明党	団　長
2	兵頭　　竜	4	愛媛維新の会	
3	古川　拓哉	4	愛媛維新の会	
4	塩出　　崇	3	愛媛維新の会	
5	中野　泰誠	2	無所属	
6	村上　信太郎	1	自由民主党	
7	田井野　駿	1	自由民主党	

５．派遣結果報告

（１）サン・セバスティアン市役所

[5/20（月)]

【文責：中野　泰誠】

対応者：エネコ・ゴイア・ラソ　市長
　　イニゴ・オライソラ　　振興担当局長
　　エイデル・カルデロン　観光担当次長

〈元カジノだったという豪奢な作りの市庁舎〉

〈左から：ひっそりとした美食クラブ入口、タパスのある店の風景、路地に飲食店が連なる〉

「美食で地方創生、発展する街」サン・セバスティアン市。近年では、サッカー日本代表久保選手が活躍するレアルソシエダの本拠地としても知られる。

スペインのミシュラン３つ星のレストラン 10 店のうち３店がサン・セバスティアンにあり、星を持つレストランが集結。美食を目的に人口約 18 万の地方都市に世界中から観光客が訪れる。

＜日本の地方都市との繋がり＞

直近では三重県多気町（人口 1.5 万人）が連携しバル通り、ホテルを作ろうという活動がある。昨年 11 月にサン・セバスティアン市長が訪問。

1990 年より香川県丸亀市姉妹都市提携

〈左から：協議風景、笹岡団長から愛媛の特産、真珠と今治タオルを贈呈〉

＜協議内容＞

・美食による街づくりを進める上で、どのような政策により実現しているのか？

・街にはプラス／マイナスの両面でどのような影響を与えているのか？

・オーバーツーリズムや不動産価格高騰など市民生活への影響はどうか？

といった観点から協議を行なった。

＜市からの現状説明＞

・スペイン全土が高い失業率（13%前後）の中、市の失業率は低く 7 %前後で推移。

・企業、教育機関の研究所が多く、教育は重要な産業で、学生の割合が 26.7%＝若い人間がいる。また、6,000 人の調査員、研究員が在籍し、スペインの中でも多い。

・税収に占める割合：観光 10%、ショッピング 12%、不動産 12%、教育 11%

・もともと、不動産の絶対数が少なく価値が高い。

価格は例年バルセロナ、マドリッドと競い、今年は 1 位だった。

・食べる、料理が好き、楽しみを共有する、という価値観が強い。

・海山に囲まれており、海、山の幸があり、地場産を大事にしている。

・スペインとフランスの国境に位置し、戦争に何度もさらされた。交易の拠点であり市庁舎は元カジノだった。

＜議論　どうやって美食の街に？＞

・美食の街と世界中から呼ばれるのは、実は最近。

例えば100年以上変わっていない木造のケーブルカーなどがあるが、もともと観光地として資源がたくさんあった訳ではなく、ハプスブルグ家マリア・クリスティーナ王妃が避暑地とし高級避暑地となった。

・1909年より300社以上の旅行業会社ができた。

・男性を中心とした美食倶楽部があり、また料理を学ぶ仕組みができ、街に波及していった。美食の街として認知されたのちに、観光でツーリストを世界から集めている。

・18万人の人口に対して、年間80万人以上が宿泊（日帰りはカウントせず)。サマーハウスが多く2ヶ月間住んでいて需要を支えている（観光客としてはカウントせず)。

・国際映画祭や花火の打ち上げなどにも力を入れている。

・食文化（＝ガストロノミー）を支えるバスク・クリナリー・センターを設立、料理関係の会社や企業が新しくできている。(後述)

・特にこの20年間で大きな変化。

2016年、欧州文化首都に選ばれて、観光客数が急激に伸びた。

さらにバスク独立に向けたテロ活動が2018年に終了宣言。外国人ツーリストが入ってこられるようになった。

・ガストロノミーとしてプロモーションに力を入れてPRしてきた。戦略的な地域は、ヨーロッパの中、世界では特にアメリカ、カナダ、日本、メキシコ、オーストラリア、その他地域。

※ガストロノミー　食と文化を考えること。

＜考察＞

「エコシステム」

・美食の文化を保つには、漁業・農業が重要な産業であり、エコシステムに基づいて、伝統的な料理から最先端な料理を研究することが増えている。

・そこでしか味わえないものや体験を大切にしており、それを支える産業を大事にしている。

・愛媛県でいえば、例えば地域ごとに大きな産地として捉えて、生産現場として大事にしているか、育てているか、連携しているか。世界に向かう料理、料理人を育てているか自分たちのこれまでの文化を大事にし、世界に発信しているかといった観点で点検をしていく必要がある。

　また、スペインは地方ごとに独立意識が非常に高く（独立運動が盛んで、独自の言語を使うほど)、自分たちの街をとても誇りに、大事にしていることが行政の人間と話

しても、街の人と話しても感じられる。教育の初期段階から、地域教育を実施すべきと考えられる。

（２）バスク・クリナリー・センター

[5/20（月）]

【文責：中野　泰誠】

対応者：ヘノベバ・マリン　グローバル開発チーム

〈左から：企業、行政、シェフが支える BCC、施設近景、様々な研究室がある〉

https://www.bculinary.com/es/home

郷土の主産業を支える人材を自分たちで育成し、世界から人を受け入れてまた発信していく、こういった人材育成の仕組みを支えるバスク・クリナリー・センター・食の大学。世界初の 4 年制食の大学としてバスク政府、サン・セバスティアン市、県が連携し 2011 年に創設。

＜協議の目的＞

・美食の町として世界中から観光客を集めているサン・セバスティアンで、バスク・ク

リナリー・センターが街づくりにどのような役割を果たしているか、また行政がどう関わっているのか。

＜センターからの説明＞

・ガストロノミーオープンエコシステム
ガストロノミーをテーマに研究、イノベーション、企業、民間人との学科教室、実習
・学費は年間 1 万€＝170 万円ほど。
・1 学年 100 人の 4 年制、大学院も設置。マスターは 1.5〜2 年。
1 年生はスペイン国内での実践、2 年生以降は国外。
・ミシュランの星付きシェフが協力。
・モンドラゴン大学の一部、運営にスポンサーもついている。
・コラボレーション企業の一部が、イノベーションプロジェクトを一緒に開発。
例えばリオハ地方のワイナリー開発など
・奈良県と連携実績あり 奈良に食の大学
なら食と農の魅力創造国際大学校　https://www.pref.nara.jp/62350.htm
・プライベートでのクッキング講習あり。
・カフェテリアは 1.2 年生が利用し、一般も利用可能、作る人は生徒である。
・40%の生徒が海外から、南アメリカから来ることが多い。
・年齢層は幅広く、全体の 6 割を占めるスペイン人は若い。
・説明してくれた方は飲食業の勉強を兼ねて来ており、宿泊施設やレストランなど勉強している。
・サン・セバスティアンで就職したいと思っている人間は多いが、世界に波及していく。
・日本で星を持っているレストラン MAZ Tokyo は卒業生である。
・200 人収容できる講堂があり、マスタークラスの生徒が主に利用、後ろはキッチンシェフを招いて講師としている。
・ガストロノミーの推進、そして理念として「360°」を掲げている。
これはプロジェクトの透明性を表す目的からきている。＝誰が見てもわかるようにしている。
・ガストロノミーの推進と理論的な部分
料理を教えるだけでなく、コマーシャル、実践と結びついている。
外からプロのシェフが来て、サン・セバスティアン市内でのイベント国際映画祭や、夏の祭り、コンテストがたくさんあり特設会場が設置されることが多く、よく学生が

参加し、出店や手伝いなどを通じて交流を広げていく。スターレストランのイベントがサン・セバスティアンでは普通になっている。

〈左から：手元が見えるように工夫された教室、最新の器具がメーカーから提供される、ソムリエ専門室〉

＜考察＞
大学により食の社会的位置を高めること
＝教育、就職のモティベーションを上げることで、地域の産業に直結し、経済的にも回収。（税収のうち、教育、飲食による割合が高い）
料理人だけを育てるのではなく、「料理を起点にしつつ、旅行や産業を支える人材」も育成している。
また、食と教育が自分たちにとって重要な産業だ、と市民が認識することで、参加の仕方や人の育て方も変わってくるのではないか。

愛媛県において、食と教育が大事な産業として捉えられているかどうか。「料理」「文化」「観光」のプロとして対外的に PR し「人もの金情報」の好循環を生み出すように行政が先導すること、エコシステムを産むことが必要。

（２）ビルバオ市役所

[5/21（火）]

【文責：村上　信太郎】

海外研修 2 日目として、ビルバオ市を訪問した。ビルバオでの視察は、スペインの工業都市であったビルバオが、地域経済復活及び活性化を目的として美術館を誘致することになった経緯や理由、さらには、美術館開設がビルバオの地域経済に与えた影響等について調査することを目的としている。

ビルバオ市役所に行き、ビルバオ市議会議員エイダー氏からビルバオの歴史、ビルバオ・グッゲンハイム美術館の成り立ちなどをご教授いただいた。

ビルバオ市の人口は、約 35 万人であり、スペイン北部のバスク州に位置する都市である。かつて 1960 年から 1970 年代にかけては、鋼業や造船業で栄えていた。しかし、1980 年代にこれらの産業が衰退したことで、失業率が 25%に達する中、追い打ちをかけるように大洪水に襲われ、街は水に浸り、川の環境は汚染され、交通渋滞と崩れかけた倉庫で街は荒れ果てていた。

この衰退したビルバオが、アートによる大規模プロジェクトで復活を遂げた。ビルバオ・グッゲンハイム美術館のオープンによるものである。1997 年にオープンしたこの美術館は、国内外の人々の想像力をかきたて、旅行者にとっては SNS に投稿できる華麗な現代美術館として、世界中から注目を集めた。それは、荒廃した地域を再生するたった一つの文化施設の能力を象徴するものであった。ビルバオ・グッゲンハイム美術館は、ニューヨークのグッゲンハイム美術館と、ビルバオ市及びバスク州政府とのパートナーシップの結果として誕生した。このプロジェクトの立ち上げ費用は、約 2 億 3,000 万ドル（当時約 240 億円）に上った。この美術館の成功により、5,000 人以上の地元雇用が創出され、6 億 5,000 万ユーロの追加収入がバスク州政府にもたらされた。ビルバオ・グッゲンハイム美術館のオープン後、観光客は美術館建設前の 20 倍に膨れ上がり、美術館の年間の入場者数は 100 万人を超え、バスク州政府は負担した建設投資額を 3 年間で回収できた。この「ビルバオ効果」は、世界で最も成功した都市再開発事例となり、建築での町おこしの世界的ブームを起こした。ビルバオの成功は、都市の文化的な訪問者を惹きつけるだけでなく、街自身に対する考え方も変えたことになったのである。

ここで、ビルバオ市議会議員 Eider 氏から教わった重要な事がある。それは、奇想天外な発想が街作りに如何に大切な事かという事である。Eider さんによればビルバオ市民は誰もアートの街として復活するとは思ってなかったとのこと。それどころか、当初は「美術館建設では雇用は見込めない」という反対意見が多くあったそうである。それにも関わらず、美術館の誘致・建設が決定された。ビルバオ経済再生のためには、何が必要か？様々な意見が当時議会で出され、新規産業への転換

助成を進めるべきという方針で決定したそうである。グッゲンハイム美術館の完成後は、アートが街に根付き、アーティストがビルバオに集まるようになったが、美術館建設は一種の賭けだったとのこと。ビルバオ市のオリジナル、かつ世界中にアピールできるシンボルとなる建築物の建設。ビルバオの将来を見据えたビジョンを描き、 従来型の工業・製造業にこだわらず、文化産業やサービス業を経済の中心に置いたことが成功の要因と思われる。これから愛媛県、日本においても、衰退していく街はこの先必ず出てくるが、その時に、知恵を出し合い、新たな発想力で街を変えていくチャンスが必ずあると考える。

（３）サンティアゴ・デ・コンポステーラ視察

[5/22（水)]

【文責：塩出　崇】

はじめに

　ご承知の通り、熊野古道は既に世界遺産としての認定を受けているが、四国遍路道は、指定に至っていない。今年も、第 9 回遍路道ウォーク・2024 おへんろフォーラムなど、各所で指定を受けるための活動が行われているが、明確な課題をもって現地を視察することによって、指定への糸口を探ることとしたい。

訪問先　国際巡礼者歓迎センターシャコベオ協会　（巡礼事務所）

面談者　アンショ・ヴァレラ・センテレス氏
　　ルイサ・レドント・エスカリス氏

・巡礼証明書の発行条件及び手続き等について

巡礼証明書の発行は、誠に今風であり、登録のための端末を操作し、言語を選択、氏名等を記入、そして、自分の歩いた道についての情報をまとめ提出しておくと、番号シートが発行され、呼び出しを待ち、証明書を受け取るというシステム。今のところは、巡礼手帳の提出を求められるが、そのうちGPSにより、確認後、証明書の発行との形も行われるであろう。なお、証明書は、歩いた距離数、手段等により異なるものが発行される。

・巡礼終了後のSDGs

巡礼終了後、事務所内の庭園には、サンティアゴの像があり、その前には、巡礼で使われたことが一目瞭然の靴・杖・貝殻・写真等が供えられていた。勿論、結願の感謝の心を込めたものでもあるのだが、巡礼終了後に多く出されるごみ処理対策を兼ねているとのことであり、よく考えられ工夫されている。

・シャコベオ協会アンショ氏とルイーザ氏による説明及び質疑応答。

事前に提出していた質問事項については、紙面にまとめての回答を頂き、それ以外のシャコベオ協会の概要・スペインの巡礼路が世界遺産となった過程(困難点など)・オーバーツーリズムについてなどの説明をいただいた後、質疑応答を行った。ガリシア州政府直営企業体シャコベオがスペイン巡礼路全体を管理、運営しており、PR活動、課題の把握、解決等がスムースに運ばれている。例えば、ボランティアによる国別対応、多言語対応がその一つとして挙げられる。

キリスト教という統一された宗教のもとに生まれた道であり、古くは、宗教と王権が、巡礼者の庇護、巡礼路の整備・管理を行っており、そのせいか、現在においても、宗教と行政とが深く関わりを持っていることに何らの疑念を持ち合わせていないことは不思議である。この点において、四国遍路道とはいささか異なる点である。

訪問先　アルベルゲ(公営巡礼宿)
面談者　同上

アルベルゲの概要について、現地にて説明を受ける。開業時間には少し早く着いたが、管理人の到着を待って、施設内の見学を行った。築250年超の古民家(日本的思考)を機能的に改築したもので、周囲の自然にマッチしている。周辺に点在する民間の巡礼宿の派手さがかえって不自然な感じである。ベット・シャワー・台所・トイレなど最低限の施設であり、巡礼者は、寝袋持参、食料持参で利用している。細かなルールは設けられていないが、このアルベルゲでは、ルール違反の事例は未だかつてないとのことであった。使用料金が安価であるため、行政としての負担になっていることが、今後の問題であるとのこと。

訪問先　ガリシア州政府
相　手　ガリシア州政府プロモーションディレクター
　　マリア・デル・カルメン・ピタ氏
　　アンショ・ヴァレラ・センテレス氏
　　ルイサ・レドント・エスカリス氏

・ガリシア州政府招待によるランチミーティング

カルメン・ピタ氏を囲んでのランチミーティングであったが、その内容は誠に多岐に亘った。まずは、ピタ氏のプロモーション活動についての話を皮切りに、受け入れ観光客のターゲットの設定、現地の受け入れ態勢、観光を支える人材育成、愛媛よりの輸出希望品目、ガリシアの特産品などに至るまで、広範囲かつ有意義な懇談がなされた。巡礼については、熊野古道、アニメの聖地巡礼、巡礼者の平等性、覚悟を持っての巡礼、のんびりと時間を楽しむ巡礼、長距離を巡礼する人と短距離しか巡礼しない人の違い、人生と巡礼、学校行事としての巡礼路の体験等、角度を変えた話し合いがあった。

終わりに

全てが居ながらにして把握できるとの考えが当たり前になった昨今の風潮で、「百聞は一見に如かず」ということは時代遅れなのであろうか。SNSを駆使して理解を深めることの重要性を否定するつもりはないが、異なる空の青さの下、風を感じ、土を踏みしめ、現地の歴史文化を、人々の息吹を五体で学ぶことの重要性を改めて確認するに至った。

歓喜の丘、大聖堂・同美術館も視察したが、それぞれにストーリがあり、参考にすべきと思う。

四国遍路道を、ぜひとも世界遺産にと強く考えているが、スペインの巡礼路と決定的に異なるところは、市民と宗教と行政との関係であろうと思う。この点については、今後考察を必要とするかもしれない。また、巡礼者に変化がみられることは、

四国遍路と似通っているが、「サンティアゴ」で統一された巡礼の道と先に世界遺産となった「熊野古道」と、「弘法大師」に象徴されつつもそれぞれの独自性を示す四国遍路道とでは、少々の異なりを感じた。

四国遍路の世界遺産登録を目指しては、四国遍路世界遺産登録推進協議会が継続的に活動を行っているが、まだまだ解決しなければならない課題も存在しているように思われる。四国遍路道の本来的な意味を失うことなく、現在の社会的ニーズに応えることのできる方法を模索していくべきと考える。

（４）在バルセロナ日本国総領事館　表敬訪問

[5/24（金)]

【文責：兵頭　竜】

5 月 24 日、在バルセロナ日本国総領事館を訪問し、四方明子総領事・五十嵐祥子首席領事と意見交換を行った。四方総領事は愛媛県にも訪れたことがあるということで愛媛の食の魅力としまなみ海道の美しさに驚嘆したことを冒頭に語っていただき訪問団としても愛媛の誇りを感じた。

バルセロナ市はスペインの首都マドリードに次ぐ第 2 の都市で国際的な観光都市であると同時に、国際会議が多く開かれる都市であり、政治・文化・学術の面で大きな影響力を有する都市である。本年 4 月には世界最大のシーフードの見本市が開催され、愛媛県からも民間企業が参加し、確かな手ごたえがあったと伺った。スペインはシーバス等の白身魚を好んで食する傾向があり、愛媛が誇る県魚・鯛は受け入れられる土壌にあり、ハマチ･ブリに関しても受け入れる余地はあるとのことで、今後の展開が求められている。中でもバルセロナは日本食レストランも多く、日本食も人気があることから、現地のシェフに使ってもらえるようにアプローチをかけていくことが必要であり、現に、松坂牛やクラウンメロンなどは有名シェフを使って展開を図っているとのことであった。スペインで愛媛の食材を広めていくにはバルセロナ・マドリードを拠点に認められることが重要であり、これらのことを踏まえながら、今後の海外戦略に生かしていかなければならない。

また、バルセロナのデジタル戦略は世界で先頭を走っており、スマートシティの取り組みは世界から注目をされている。スマートシティは町中にセンサーを設置しネットワークを経由してデータを送受信させ、集められた情報はセンティーロと名付けられた統合システムに集約され、交通や環境など住民生活に大きく寄与している。活用事例を挙げると、町中にあるゴミ箱にセンサーを取り付け、重量などを検出してセンティーロに送信し、収集車が回収に向かい効率化が図られ、ゴミ回収車の走行距離の減少、排気ガスとコスト削減に寄与している。また、歩行者が多い道路にスピードセンサーを埋め込み、通過する自動車が時速 30km を超過すると信号が赤になる仕組みを導入し、安全運転を意識させ、速度抑制と事故防止につなげてい

るなど、枚挙にいとまがない。愛媛県も 2021 年 3 月にデジタル総合戦略を策定し、市町と連携しながら愛媛の将来を切り拓くＤＸを展開しているが、バルセロナ市の戦略は愛媛のデジタル戦略にも有効活用できる部分はあると感じた。昨年、11 月には愛媛県職員も現地に視察に足を運んでおり、今後の展開が求められる。

また、意見交換の中で愛媛の自転車文化に触れ、しまなみ海道のサイクリングは大きな魅力であるということを言われ、スペイン人にも受け入れられるとのことで、今秋のしまなみサイクリング大会はアピールすべきだと、ご意見をいただいた。現在、円安の影響もあって過去最高水準の外国人観光客が日本を訪れている。10 月からはマドリードへの直行便が再開することもあり、インバウンド対策を講じて、スペインからの誘客をサイクリングというツールを活用し増やしていくことが愛媛の観光振興につながっていくと感じた。

四方総領事は、スペインの国民性にも触れ、新しいものが好きで民主主義を大切にし、新しい提案を受け入れる土壌があるということを語られた。そういったことが柔軟に政策に反映され、住民生活に寄与していることにつながっており、私たちも政治に携わる中で改めて民意の重要性を再確認したところである。

（５）RCD エスパニョール

[5/24（金)]

【文責：古川　拓哉】

プロスポーツを活用した街づくりや、プロスポーツとして地域貢献をどのように行われているのかを視察するために、スペイン・バルセロナに本拠地を置く「RCD エスパニョール」を訪問した。

RCD エスパニョールは、バルセロナ大学の学生が中心となって設立されたクラブチームで、2023―2024 シーズンは、セグンダ・ディビシオン（2 部リーグ）で戦っている。当時、リーグ戦の終盤で上位争いをしていた中での訪問となった。

日本では、元日本代表の中村俊輔が所属したチームとしても馴染み深い。また、

クラブのアイデンティティとなっている「ダニエル・ハルケ」は、中村と同時期に下部組織からの生え抜きでチームキャプテンとしてチームに所属していた。将来を嘱望されチームの中心人物だったにも関わらず、突然に訪れた彼の死は、チームや多くのサポーター、ファンに衝撃を与え、その死が惜しまれた。死後、彼を顕彰するためにホームスタジアムでの試合では、ハルケが生前付けていた背番号 21 にちなみ、試合開始から 21 分にサポーターによる追悼の拍手が巻き起こる。同スタジアムの 21 番ゲートはダニハルケ・ゲートと呼ばれハルケの彫像が設置されている。育成に定評のあるチームが、生え抜きのトップ選手の死を乗り越え、そのことをチームのアイデンティティとして明確に捉え、クラブとサポーターの一体感の形成につながっていると感じた。視察先のクラブ・トレーニングセンターでもそのことは感じられた。入り口にあるダニエル・ハルケの彫像の手にタッチしてから、センターに入っていく選手の姿も見られ、存在の大きさに驚いた。

エスパニョールは、「すべての企業活動を手の届く近い場所で行えるようにする」という考え方を掲げ、スタジアム、トレーニングセンターがバルセロナ市街に近い位置にあり、規模を小さくする代わりに、非常に便利な立地となっている。

トレーニングセンターでは、ユースチームとトップチームが同じトレーニングセンターで練習することから、全ての選手が目標となるトップチームを近くに感じることが出来る。若い選手が隣のコートでレギュラーメンバーの息遣いを感じたり、怪我をした選手がジムなどでケアをしながらモチベーションを上げていくのに大きく役立っている。

また、地域との関わりを大切にしており、市と協働で地域の家庭環境が困難な子どもにプログラムとして、サッカーをする機会を提供している。参加費は無料で、ユニフォームやスパイクなどの物品も提供されているとのこと。コーチや選手と触れ合うことによって、競技力の向上とともに青少年の健全育成に大きく貢献し、サッカーを通じて私生活が安定した子ども達も多数いるとのこと。クラブも、行政や地域とともに歩む姿勢を大切にし、今後も規模を拡大しながら行うとのことで、強い想いがあることが伝わってきた。

RCDE スタジアムは、バルセロナ都市圏にあるクルナリャー・ダ・リュブラガードとアル・プラ・ダ・リュブラガードという 2 つの自治体にまたがり建設されている。収容人数は 40,000 人。建設費は約 6,000 万ユーロとなっているが、収益性を上げるためにネーミングライツをはじめ、選手の入退場を間近で見たり、選手とコミュニケーションが取れる高額チケットやシーズン外のコンサートなど様々な取り組みを進めている。建設にあたっては、2 つの行政を跨ぐものは、日本ではあまり聞くことのない形態で、補助金も、それぞれの行政から出されている。さらに、スタジアムとの相乗効果を高めるためにショッピングモールやスポーツ施設、学校なども近くに併設され、スタジアムを中心とした街づくりや賑わいづくりに大きく貢献している。

愛媛県内でも、プロサッカーをはじめ各スポーツ団体が様々な活動をしているが、どのようにしてそのエネルギーを街づくりに活かすのかが問われている。人口減少時代の中で、「スポーツをする喜び、見る喜び、支える喜び」を広げ、更には青少年の健全育成、地域経済の活性化、都市計画の再検討など街づくりと深く関連づけることによって新たな可能性を見出していかなければならない。今回の RCD エスパニョールのように、行政を跨いだ広域的な支援も基礎自治体の体力が減少している中では有効な手立てとして考えていかなければ、これからの不安定な時代を乗り越えていけないと感じるものとなった。

（６）バルセロナ市の DX を核とするスマートシティの取組みを現地視察

[5/25（土)]

【文責：田井野　駿】

【過密による弊害と解決への取組み】

現地時間５月２５日（金）県議会派遣団のスペイン視察も佳境に差し掛かるなか、バルセロナ市滞在２日目に現地のスマートシティの取組みを視察した。

同市は元来人口過密地域であり、1992 年に開催されたバルセロナオリンピック以降、市の知名度が飛躍的に伸びたことにより国内外からの観光客が急増。現在も経済的に観光業に大きく依存している。そのことから市内での慢性的な交通渋滞や交通事故の多発、路上の衛生環境の悪化やオーバーツーリズム等の問題に悩まされてきた。同市はこれらの課題解決に向けて 2000 年頃から ICT を活用したスマートシティ化を推進してきた。日本で「IT 革命」が登場した時代とほぼ同時期であり、いかに同市の取組みが世界に先駆けたものであったかがわかる。

【交通面の問題解決】

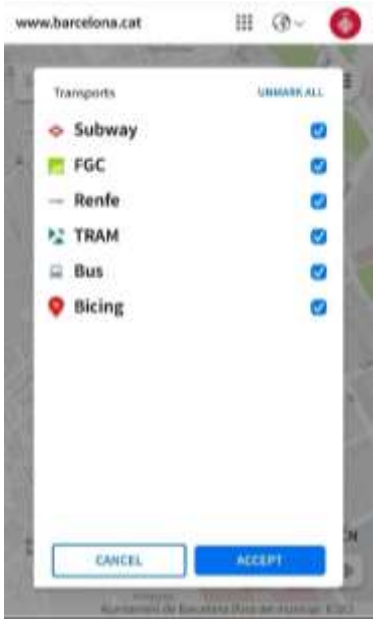
同市は碁盤の目状の道路が特徴的であり、近年では前述の問題解消を目的とする自動車専用道、自転車専用道、歩行者専用道への再整備が進みつつあり、安全性や環境面に配慮した都市空間への転換が図られている。

【DX 推進によるスマートシティ化】

バルセロナ市は市民生活の安全性や衛生面向上を目指し ICT を活用した社会インフラの構築に取り組んでいる。先述した通り交通安全面の問題解決は同市の大きな課題であった。同市の公式ホームページ上では交通情報を把握できる地図を閲覧することができる。この地図上には市内各地の道路上に配備されたセンサーによって把握した騒音量に基づく渋滞状況や速度取締りの実施状況等、市民に交通状況のライブ情報を提供している。視察でも街中にはセンサーやカメラが取り付けられた信号機、外灯等が至る所に設置されているのが確認された。

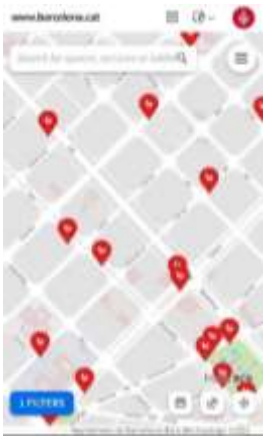
センサーを用いた速度取締りは信号機と連動しており、速度超過を察知すると次の信号が赤に切り替わる。これは事故防止に加え車両の流れの平準化に貢献しており、信号無視による交差点内での立ち往生がもたらす慢性的な渋滞の緩和にも貢献している。

交通情報の提供は安全面の向上のみならず公営駐車場の空き状況の把握等、利便性向上にも寄与している。市民は自車のナンバーを市の運営するアプリに登録、目的地を検索することで推奨ルートと共に近隣の空いている駐車場の情報を閲覧することもできる（信号無視や速度超過等の交通違反を犯すとナンバープレートの情報をもとに違反通知が届くとのこと）。救急等の際にはセンサーによる遠隔操作で信号を切り替え、迅速に搬送できる仕組みにもなっている。



※同市のホームページに掲載されたマップより。
地下鉄やバス、シェアサイクルステーション等必要な情報を選択することができる

同市ではシェアサイクルが市民生活に欠くことのできない交通手段として定着している。滞在中、市内各地にサイクルステーションが整備されているのを頻繁に目撃した。同市は市内 400 か所以上のステーションに 6,000 台以上の自転車を配備しており、市民は年間登録料を支払うことでこの自転車を自由に利用することができる。なお、30 分以上かかる場所に行く際は追加料金が発生するとのことだが、その間途中のステーションで別の自転車に乗り換えれば追加料金は発生しない。ステーションごとの自転車台数はセンサーで管理されており、視察中にも貸出し可能な自転車がなくなったステーションにトラックが自転車を追加配備する様子を確認した。



この他にもセンサー管理されているものは多岐に渡る。外灯も多くがセンサーを用いて遠隔管理されており、人の通行量や周囲の明るさを察知して点灯を開始、治安の維持や省エネルギー化に貢献している。州庁舎付近のポールは登録された車両が近づくと下へ降りて通行を許可する等、視察を通して市民生活の至る所にこのシステムが浸透しているのが確認された。そして交通面や安全面の ICT 技術

活用に加え、環境衛生面にもこのシステムが大いに役立っている。同市の街中には大きなごみ箱が至る所に設置されていた。市民が自分で収集箱の下部にあるバーを踏んで箱を開けてごみを捨てることができる。以前はごみ箱が一杯になっていないか収集車が巡回して確認しており、それが原因で渋滞も頻発していたとのこと。しかし、このセンサーにより各ごみ箱の廃棄物の重量を認識、回収が必要になったごみ箱を目指して収集車が向かうシステムが確立されたことにより交通渋滞も緩和につながると同時にごみ場所の設置個所も飛躍的に伸び、同市の衛生環境の改善に大きく貢献した。

以上がこのたびのスペイン派遣で学んだバルセロナ市のスマートシティの取組みの概要である。同市での学びから得られたものを県政の発展へとつなげられるよう努力する。